

Artemisia Edition / 16～17世紀イタリアの女子修道院における音楽

最近コルネット奏者のブルース・ディッキーが上記のようなユニークなエディションを出版しはじめました。彼自身の解説をもとに、ここにご紹介いたします。

16～17世紀にイタリアの修道院で修道女たちによって作曲され、演奏された知られざる名曲を発掘するというのがArtemisiaの目的です。

この時代のイタリアの修道院についての当時の様々の記述によると、修道院にはすばらしい歌手、演奏家、さらに作曲家さえもいたことがわかります。修道院に入るということは結婚をするか否かの二者択一をすることであるならば、女性が誇りを持って独身を通すために、貴族や裕福な階級の娘が修道院に入ることは当時よくあったことでしょう。宗教的な動機づけというよりも結婚によって多額の持参金を払わなければならない家族の経済的リスクを回避するという理由もあります。修道院は少女たちに教育を与えますがそのなかに音楽も含まれます。修道女たちにとって音楽課目は重要でした。楽しみ、慰めであると同時に音楽によって外界とつながりを持つからです。非常に質の高い彼女たちの音楽が、イタリアの多くの都市で祝祭日の儀式の折の重要なアトラクションとなっていました。しかし教会の権威者はこれを不敬とし、1563年のトレントの公会議でこういった『墮落』から修道院を改革することを希望し、禁域の規定も厳しくなります。それによって演奏活動は衰退しますが、そのようななかでも彼女たちは作品を書き続け、特に1580年から1700年にかけて多くの楽譜を出版しました。

修道女による音楽、つまり男性不在の音楽という特殊なシチュエーションがここにあります。楽譜を校訂する際に謎であったのは、彼女たちの作品にはしばしばテノールやバスの声部があるということです。いったいどうやって演奏したのでしょうか？ 楽器の使用は修道院では禁じられていました。しかし、彼女たちがそれらの規則を無視して楽器を使用したということはあることです。実際楽器を指定した曲も書いているので、楽器でバス声部を演奏した可能性はじゅうぶんあります。教会ではオルガンが聖なる楽器として使用を許されていました。またチェンバロも勉強の目的で、ヴィオラ・ダ・ガンバはバスラインを演奏する目的で許されていました。しかし驚いたことに修道女たちはバスをトロンボーンに指定したこともありました。上長の許可があったかどうかは不明です。もうひとつの可能性として修道女のなかに非常に低い声の出る女性たちがいた、ということです。これは「女性のバス」というリストが残っていることから明らかです。

それらのなかから、このたび次の2冊の楽譜を購入しました。

#Two Christmas Motets by Chiara Margarita Cozzolani (1602-c1677) MC1/C386/1

Quis audivit unquam tale?/Gloria in altissimis Deo

シスター・キアラ・マルガリータ・コッツォラーニは1620年、ミラノの裕福な家庭に生まれ、18才で女子ベネディクト会修道院 S. Radegonda に入り、後には修道院長も勤めています。ニューグロヴ音楽辞典は彼女は修道院に入る前、すでに歌手として知られていた、その後修道生活のなかで質の高い教会音楽を生み出し、それらはまぎれもなく自分の修道院で演奏するためのものであったが、ミラノの別の教会で演奏されていた可能性もある、としています。このクリスマスモテット "Quis audivit..." は2つのソプラノとバス（この版では女性の音域に移行されている）と通奏低音のための曲で、幼子キリストのご降誕と受肉の神秘が歌われています。"Gloria in ..." は4声部から成りますが、2つのソプラノパートが天上界の天使を司り、下の声部（アルトとテノール、この版ではテノールはオクターブ上に移行されている）は地上の喜び、羊飼いの歌を表しています。全体が天使と羊飼いのディアローグになっていますが最後のハレルヤは共に合唱、そして最後の9小節はだんだん遠くに行くように声をひそめながら、と注釈がついています。

コッツォラーニのいたこの修道院は音楽で有名でした。当時のポローニャのある司祭は「この、女子ベネディクト会修道女たちはヨーロッパ・カトリックの最もすぐれたアンサンブルのひとつである」と絶賛しています。大きな祝日には彼女たちの音楽を聞くために市民がつめかけ、修道院内の一般信徒席はぎゅうづめになって、窒息する人も出たというほどであったと伝えられています。

#Two Motets by Maria Xaveria Perucona (1652-?) MC1/P471/1

O superbi mundi machina/Gaude plaude

ベルコーナは北イタリア、ロンバルディア地方の貴族の娘で16才にしてノヴァラ近郊にあるウルスラ会修道院に入ります。請願前にすでに高度な音楽教育をうけており、若い時期に、作品集を出版していますが、残念ながらその後の消息はわかりません。ここに校訂された曲は1675年ミラノで出版された "Sacri concerti de motetti" に収められており、彼女はこの曲集を「私の貧しい才能が生んだ最初の小さな子供」と呼んでいます。この "Gaude plaude" は乙女殉教者を讃える曲で、その時々によってSanta ~の部分にふさわしい名前を入れるようになっています。この版ではベルコーナの守護聖人であるUrsulaの名が選ばれています。ウルスラ修道会は隠遁生活より使徒的活動に携わることを重視したため、比較的自由に音楽活動ができたようで、彼女以外にもIsabella Leonarda という修道女作曲家の作品がのこされています。

このArtemisia のシリーズはイタリア初期バロックの一断面を示すものとして興味深いものではないでしょうか。カタログを御覧になりたい方、購入したい方は資料室の杉本までお問い合わせください。